

〈女はらから〉の物語史

大井田 晴彦

はじめに

王朝物語に多く見られる話型の一つに、男君がはからずも美しい「女はらから」を垣間見し、恋物語が始まる、というパターンがある。さまざまな物語で繰り返し頻用されるように、この話型には、物語を語り起こし、展開させてゆく力が秘められているらしい。平安前期物語から、『源氏物語』を経て、後期物語に至るまで、「女はらから」の物語は大きな流れを形成している。もちろん、同じ話型を踏まえていても、作品によってその性格は多様であり、文学史的な変遷も見られる。本稿は、個々の物語の論理と方法に即しつつ、「女はらから」の物語史をたどろうとするものである。

「女はらから」を垣間見する、という話で、まず想起されるのは『伊勢物語』初段であろう。

昔、男、初冠して、奈良の京、春日の里に、しるよしして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男、垣間見てけり。思ほえず、ふるさとに、

〈女はらから〉の物語史(大井田)

いとほしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。その男、信夫摺りの狩衣をなむ着たりける。

春日野の若紫のすり衣しのぶの乱れかぎり知られず

となむ、おひつきて言ひやりける。ついで面白きことともや思ひけむ。

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。(引用は鈴木日出男『伊勢物語評解』による)

主人公の青年は、元服したばかり。晴れて平安京の貴族社会の一員となったわけだが、都の生活に何かなじめないものを感じていらしい。彼の足は、おのずと奈良の古都、すなわち祖父平城上皇ゆかりの地へと向かう。そこで思いがけずも美しい「女はらから」を見初め、惑乱した彼は、その激しい想いを和歌に封じ込めて贈る。この歌には、三つの地名が詠み込まれていることに気づく。「春日野」は言うまでもなく、「紫」は、「武蔵野」を連想さ

せる植物。また「しのぶ(信夫)」は、「陸奥の」(古今集・恋四・七二四・河原左大臣)とあるように、東北の地名である。すなわち、「春日野」→「武蔵野」→「陸奥」というベクトルをこの歌は有しており、以後の物語を予告しているのである。^①まさに劈頭を飾るにふさわしい。「みやび」の物語は、ここに始発した。

この『勢語』初段を踏まえ、新たな物語を語り起こしたのが、巻名にも明らかのように、「源氏物語」若紫巻である。

日もと長きにつれづれなれば、夕暮れのいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ち出でたまふ。人々は帰したまひて、惟光朝臣とのぞきたまへば、ただこの西面にしも、持仏据ゑたてまつりて行ふ尼なりけり。簾すこし上げて、花奉るめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置き、いと悩ましげに読みたる尼君、ただ人と見えず。四十余ばかりにて、いと白うあてに瘦せたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうちくしげにそがれたる末も、なかなか長きよりもこよなういまめかしきものかな、とあはれに見たまふ。清げなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

(若紫①二〇五―二〇六 引用は新編日本古典文学全集による) わらわ病みの療養に北山を訪れた光源氏は、生涯の伴侶となる美少女、若紫を垣間見る。若い貴公子が、都を離れた地で、美しい女性と出会うという筋立てが踏襲されているが、単なる模倣にとどまっただけではない。「なまめいたる女はらから」は、結婚の対象とならない「十ばかり」の幼女と「四十余ばかり」の尼君へと転換され、やや趣の異なった恋物語が始まること予告されているのである。

一

しばらく『伊勢物語』について見てゆきたい。初段では、なぜことさらに「女はらから―姉妹―」と語られるのか。一つには、『遊仙窟』に登場し、主人公を歓待する、十娘・五嫂を意識した設定とする説がある。^②『遊仙窟』の影響は、随所に指摘でき、認めてよいだろう。また、『古事記』に見える、ニニギノミコトのイハナガヒメ・コノハナサクヤヒメ姉妹との結婚のごとき、いわゆる姉妹連帯婚の発想によるとする説もある。^③しかし、最も重要なのは、同じ「勢語」四十一段との関連である。初段は、四十一段の敷衍、派生した章段と考えられるのである。

昔、女はらから二人ありけり。一人は、いやしき男の貧しき、一人はあてなる男持たりけり。いやしき男持たる、師走

のつごもりに、袍を洗ひて、手づから張りけり。心ざしはい
たしけれど、さるいやしきわざもならはざりければ、袍の肩
を、張り破りてけり。せむ方もなくて、ただ泣きに泣きけ
り。これを、かのあてなる男聞きて、いと心苦しかりけれ
ば、いと清らなる緑衫の袍を、見出でて、やるとて、

紫の色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける
武蔵野の心なるべし。

「紫の」の歌は、『古今集』に業平の作として載る（雑上・八
六八）。末尾の「武蔵野の心なるべし」とは、同じく『古今集』
の「紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」（雑
上・八六七・詠み人しらず）による。「紫」はゆかりの色。すな
わち、愛する人の縁につながる人々は、すべて同様に愛おしく思
われる、という意味である。初段と四十一段は、ともに「女はら
から」が登場し、「紫」が詠み込まれ、また「狩衣」「袍」の衣服
が鍵語となっている。また、末尾に、『古今集』の和歌が補足的
に引用されている。緊密に対応しているといえよう。ところで、
『和歌知頭集』は、「有常が娘どもなり。いやしき男は藤原敏行な
り」と具体的に人名を当て嵌めて理解している。この問題につい
ては後にふれたい。

この段の眼目は、困っている義理の兄弟に、救いの手を差し延
べる、主人公の思いやりの深さを称揚するところにある。次の十
六段も、男のかかる美質を語る、同趣向の段であり、やはり四十

（女はらから）の物語史（大井田）

一段の敷衍章段と見られる。有常の妻が、既に尼になっている姉
のもとへ移るとあるのも、「女はらから」を意識しての叙述かも
しれない。

昔、紀有常といふ人ありけり。三代の帝に仕うまつりて、
時にあひけれど、後は、世変はり、時移りにければ、世の常
の人のごともあらず。人がらは、心うつくしく、あてはかな
ることを好みて、こと人にも似ず、貧しく経ても、なほ、昔
よかりし時の心ながら、世の常のことも知らず。年頃あひな
れたる妻、やうやう床離れて、つひに尼になりて、姉の先立
ちてなりたる所へ行くを、男、まことにむつまじきことこそ
なかりけれ、「今は」と行くを、いとあはれと思ひけれど、
貧しければ、するわざもなかりけり。思ひわびて、ねむごろ
にあひかたらひける友だちのもとに、「かうかう。『今は』と
てまかるを、なにごともいささかなることもえせで、つかは
すこと」と書きて、奥に、

手を折りてあひ見しことを教ふれば十といひつつ四つは
経にけり
かの友だち、これを見て、いとあはれと思ひて、夜の物まで
贈りて詠める、

年だにも十とて四つは経にけるをいくたび君をたのみ来
ぬらむ
かく言ひやりたりければ、

これやこのあまの羽衣むべしこそ君がみけしと奉りけれ
喜びにたへで、また、

秋や来る露やまがふと思ふまであるはなみだの降るにぞ
ありける

この段では、業平の岳父にして友人である有常の、時流から取り残され、羽振りが悪くなっても、心の美しさを失わない美質が、まずは称揚されている。逆境にあつても高貴な心を保ち続ける、かかる有常の生き方は「みやび」と言つてよいだろう。しかし、それは自己本位なものではない。生活者としてはまったくの無能であり、良き夫とは呼べまい。長年連れ添つてきた妻との間には、次第に溝が生じ、もはや修復不可能となつた。妻は尼となつて去つて行つた。別れに際して、有常は何もしてやれぬ不甲斐なさを痛感する。そうした有常に、男は、さまざま贈り物をし、援助する。男の歌の「年だにも」の歌は、年月さえも十といつて四つ、すなわち四十は過ぎしてきたのに、奥さんは、いったい何度あなたを頼りにしてきたのでしょうか、四十などものの数ではありませんよ、の意。有常には見えていない、妻の心境を深く思い遣つている。有常よりも、次元の高い「みやび」の人として主人公が賞賛されているのである。

四十一段と関連の深い章段がもう一つある。百七段である。

昔、あてなる男ありけり。その男のもとなりける人を、内
記にありける藤原の敏行といふ人、よばひけり。されど、ま

だ若ければ、文もさをさしからず、言葉も言ひ知らず、いはむや、歌は詠まざりければ、かのあるじなる人、案を書きて、書かせてやりけり。めでまどひにけり。さて、男の詠める、

つれづれのながめにまさる涙がは袖のみひちて逢ふよし
もなし

返し、例の、男、女に代はりて、

浅みこそ袖はひつらめ涙河身さへながると聞かば頼まむ
と言へりければ、男、いといたうめでて、今まで巻きて、文箱に入れてありとなむいふなる。

男、文おこせたり。得て後のことなりけり。「雨の降りぬべきになむ見わづらひ侍る。身幸ひあらば、この雨は降りらじ」と言へりければ、例の男、女に代はりて詠みてやらす、
数々に思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされ
る

と詠みてやれりければ、蓑も笠も取りあへで、しとどに濡れて、まどひ来にけり。

主人公を「あてなる男」とする点、四十一段と共通している。藤原敏行が通うようになったという「その男のもとなりける人」をどう解すべきか。『新釈』が「めしつかふ女なり」として以降、近現代の注釈はほぼこれを踏襲している。対して、古くは、『肖聞抄』が「業平のいもうとなり。初草の歌詠みし女なり」とし、

『惟清抄』『闕疑抄』『拾穂抄』『臆断』なども同様の解釈を示す。すなわち、四十九段で、兄である主人公から懸想じみた歌を贈られて当惑し、「初草のなごめづらしき言の葉ぞうらなく物を思ひけるかな」と詠んだ、「妹のいとをかしげなりける」と同一人物だという。ここで、四十一段についての『知頭集』の理解を踏まえれば、業平の義妹（妻の妹）と考えることができるのではないか。⁴

しかしながら『伊勢物語』の本文に即する限り、やはり百七段の女は、主人公に仕える女としか理解できない。また、四十一段の「いやしき男」を敏行とするのも根拠が弱い。にもかかわらず、無理を承知でかかる理解にこだわるのは、『源氏物語』宇治十帖への展開が見通せるからなのである。すなわち、生活に困窮する岳父有常を援助し、また妻の妹を後見・庇護し、敏行との仲を取り持つ、『勢語』の主人公の姿は、零落した八宮家を支援し、恋人大君の妹である中君の後見役を任じ、匂宮との仲介をする、薫を彷彿させるものが多分にある。宇治十帖の（女はらから）の問題については、後に改めて論じたい。

『伊勢物語』の（女はらから）関連章段では、当の姉妹よりも、男に焦点が当てられているのが特徴的である。すなわち、ゆかりの人々への行き届いた心遣い、男の思いやりが賞賛されている。対して、姉妹については、その性格も容貌も描き分けがなされておらず、没個性的である。

（女はらから）の物語史（大井田）

二

次に『うつほ物語』を取り上げたい。物語のヒロイン、あて宮と女一宮は、正確には叔母と姪の間柄ではあるが、年も近く、源正頼邸で姉妹のように育った。（女はらから）の物語の変型として考えてよい。あて宮求婚譚の始発の巻である「藤原の君」から既に女一宮は登場しているものの、存在感は希薄で、これといった役割を与えられてはいない。物語の進展に伴って、次第に輪郭が鮮明となってくる。

月の面白き夜、今宮（女一宮）、あて宮、簾のもとに出でたまひて、琵琶、箏の琴、面白き手を遊ばし、月見たまひなどするを、仲忠の侍従、隠れ立ちて聞くに、調べよりはじめ、違ふところなく、わが弾く手と等しくと聞くに、静心なし。身はいたづらになるとも、取りや隠してましなど思ふにも、母北の方の御ことを思ふに、なほ、いとほしく思ほゆ。（中略）宮（女一宮）、見たまひて、「いづこにあるぞ」とのたまふ。孫王の君、「東の簀子に」。「さは、琴弾きつるは聞きつらむな。皆、上手ぞや。我は聞かじ」とて入りたまひぬ。（中略）

（あて宮）川の瀬に浮かべるおのが篝火の影をやおのがこひと見つらむ

などのたまふ。（祭の使・おうふう二三五―二三七）

仲忠が、女一宮とあて宮の合奏を立ち聞きする。ここで注意されるのは、仲忠とあて宮の琴の音が、酷似していることである。物語は琴の音によって、二人の理想的な男女を結びつけようとしている。仲忠とあて宮の琴が共振しているのに対して、女一宮はこの場から疎外されているような感がある。この場面は、後の三人の関係を考える上で、象徴的といえよう。とはいえ、この辺りから、女一宮の存在が重みを増してきているのも事実である。年立上、次巻にあたる「吹上」下巻では、「涼にあて宮、仲忠に女一宮」という官旨が下される。仲忠への降嫁を射程に収めて、一宮の存在が上昇してくるのである。

そがうちにも、藤中納言は、参りたまはざりし時にも、人よりはいらへのためひ、宮にても、時々聞こえさせなどせしを思ひつつ、心魂もなく嘆くこと限りなくて、一宮とも、時々、このついでに、かの御ことを聞こゆるほどに、宮の君(藤壺)の御もとより、かく聞こえたまへり。「久しくなりにければなむ。日ごろもの騒がしく思すらむに、静かにと思ひたまへつるほどになむ、今までになりける。

筑波嶺の峰までかかる白雲を君しもよそに見るは何なりかの物懲りせし夕暮れこそ思ほゆれ」など聞こえたまへり。宮、見たまひて、うち笑ひたまふ。中納言、「何ごとならむ。見たまへばや」と聞こえたまふ。(中略)(女一宮)「いでや。筑波嶺は、蔭あれどもとなむ見ゆる。

峰高み夢にもかくはしら雲を今も谷なるものこそ見れ」

と聞こえたまふ。中納言、「かの御方にも聞こえし限り、魂の静まる時なかりしうちに、いみじき秋の夕暮れこそありしか、ほのかに見たてまつりしかば、静心なく思ほえしかば、近くだにとて参り来りし夕暮れに、月見たまふとて御遊ばししに、死に入りて、身のいたづらにならむとも思はず、片時世に経べき心地もせで、せぬわざわざしつべき心地こそせしか。今まで生きて巡らひ、さる過ちせずなりにけるは、かくても候ふべきにこそありけれ。」

(沖つ白浪・四五二〜四五三)

あて宮は、春宮へ入内し、女二宮は仲忠のもとへと降嫁する。姉妹のごとく仲むつまじく育ってきた二人は、それぞれ別の人生を歩み出すこととなった。右は、仲忠と一宮の結婚間もない場面である。前掲の「祭の使」における、感動的な夕暮れの場面を回想し、共有する仲忠・あて宮・女一宮。仲忠は、あて宮への想いを胸に封じ込め、新たな関係を築き上げていこうとする。そして、女一宮との結婚を運命的なものとして受け止め、よき家庭人として生きていこうと決意するのである。⁵⁾

君(藤壺)、「(女一宮ハ)なかなか、いとよしや。よに心憎く思ひたる人(仲忠)につきたまひて、一所、心やすく。おのれこそ、かかる大たかりに出だし放たれて、よには憂く

まがまがしきことを聞き、見たまふ人（春宮）は、ことにはなやかにも見えたまはず、むつかしきままに、目も見合はせただてまつらずむつかれば、心よからずとは思されためり。いとこそ用なけれ。里にありし昔のみ恋しくて、あらじものを、何せむに、かく出だし立てられてあらむと思へば、心憂く悲しきことも多くなむ。」

（蔵開上・五一二）

「今宮こそ、幸ひおはすれ。見聞くかひある御人（仲忠）を、一人領じたまひて、使ひ人よりけに従へたまふなる」など、藤壺はのたまふ。

（国讓上・六七六）

入内後、春宮の寵愛を独占する藤壺（あて宮）への妃たちの嫉妬は激しい。春宮も魅力に乏しい。苦悩する藤壺は、里での暮らしを懐かしみ、かつ仲忠と結ばれた女一宮をうらやましく思う。夫に対しわがまま放題に振る舞い、可愛らしい姫君（いぬ宮）までもうけた一宮に、藤壺の羨望は強まってゆく。

一宮、何ごとを思すらむ。この造りののしる様は、いみじう面白きことあるべかなり。尚侍もろともに迎へて、いぬ宮に琴教へむを一宮聞きたまはむに、世にさることはまたあらじを。年ごろ聞かまほしうしたまへど、ここに聞かせずなりにき。惜しむ手を、かの折にこそは残りなく聞かめ。うらやましようこそあれ。

（楼上下・八五五）

あて宮、いみじうねたううらやましよう思すに、一宮おはせぬをぞ、少しうれしう思す。（中略）あて宮、「一宮、何ごと

（女はらから）の物語史（大井田）

を思すらむ。女みこおはせましかば、うらやましからまし」と聞こえたまへば

（楼上下・八八七）

藤壺は、常に一宮のことが気に掛かるらしい。やがて、いぬ宮への秘琴伝授が始まった。女一宮といえど、伝授の場に立ち入るとは許されない。それを知って、藤壺は、少し溜飲が下がる思いをしたというのである。

このように、かつて正頼邸で姉妹のごとく育った二人は、それぞれ別の運命を歩む。苛酷な後宮に身を置き、厳しい政争を勝ち抜いていく藤壺と、「まめ人」仲忠との平穏で幸福な結婚生活を営む女一宮の姿が、繰り返し対比的に語られている。「勢語」では、もつばら男の立場から語られていた（女はらから）の物語が、『うつほ』では、まさに女の生き方の問題として問われるようになるのである。なお、物語には、女一宮の同母妹として女二宮が登場する。特に後半部に至ると、多くの男たちの心を悩ます高嶺の花として、その存在感を増してくる人物である。「国讓」では、五宮・祐澄・近澄らが略奪を企てるものの、仲忠の機転で未然に防ぐことができた。仲忠に降嫁した姉一宮に対し、二宮はどのような人生をたどることになるのか。物語は二宮のその後までは語っていない。

三

〈女はらから〉の物語が、繰り返し語られるのが『源氏物語』である。前掲の「若紫」をはじめとして、物語の所要所にこの話型が見出される。作者は、新たな物語を紡ぎ出す原動力をこの話型に認め、好んで用いている、とおぼしい。

かの本意のところは、思しやりつるもしるく、人目なく静かにておはするありさまを見たまふもいとあはれなり。まづ、(麗景殿)女御の御方にて、昔の御物語など聞こえたまふに、夜更けにけり。(中略)近き橋の香りなつかしく匂ひて、女御の御けはひ、ねびにたれど、飽くまで用意あり、あてにらうたげなり。(中略)西面(花散里)には、わざとなく忍びやかにうちふるまひてのぞきたまへるも、めづらしきに添へて、世に目馴れぬさまなれば、つらさも忘れぬべし。

(花散里②一五五―一五七)

桐壺帝崩御後、閉塞感を抱く光源氏は、麗景殿女御とその妹のもとを訪れ、昔を懐かしく語り合う。姉妹は没個性的であり、描き分けはなされていない。「花散里」は、深い叙情性をたたえた歌物語的な巻であり、その点でも『伊勢物語』に通ずるものがあるう。

ところで、本稿でいう〈女はらから〉の話型とは、二人の女性が実際に血のつながった姉妹であることを、必ずしも意味しな

い。男性の側から、どのように垣間見られているのが問題なのである。同じ場に二人の女性がいること、空間を共有していることが重要なのである。よって、朱雀院の女二宮・女三宮姉妹のよくな例は、考察の対象外であることを断っておく。むしろ次のような、血のつながらぬ継母娘も〈女はらから〉の話型に属するものと考えてよい。

(空蟬八)頭つき細やかに小さき人のものげなき姿ぞしたる、顔などは、さし向かひたらむ人などにもわざと見ゆまじうもてなしたり。手つき瘦せ瘦せにて、いたうひき隠しためり。いま一人(軒端荻)は東向きにて、残るところなく見ゆ。白き羅の単襲、二藍の小袿だつものないがしろに着なして、紅の腰ひき結へる際まで胸あらはにばうぞくなるもてなしなり。いと白うをかしげにつぶつぶと肥えてそぞろかなる人の、頭つき額つきもの鮮やかに、まみ、口つきいと愛敬づき、はなやかなる容貌なり。(中略)(空蟬八)目すこしはれたる心地して、鼻なども鮮やかなところなうねびれて、にほはしきところも見えず。言ひ立つればわろきによれる容貌を、いといたうもてつけて、このまされる人よりは心あらむと目とどめつべきさましたり。(空蟬①一二〇―一二二)

光源氏が、甚に興ずる、空蟬と軒端荻の継母娘を垣間見する場面である。「花散里」とは異なり、かなり二人の描写が対照的になっている。これは、二人の造型に『伊勢物語』第二段が踏まえ

られていることに起因する。この段では、西の京の人妻が、「かたちよりは心なむまさりたりける」と語られる。すなわち、「心」が空蟬に、「かたち」が軒端萩に振り分けられて造型されているのである。空蟬、軒端萩に関する描写は、それぞれ波線、点線で示した。前者は、重々しく思慮深く、気品が感じられる、後者は、若々しく華やかで快活、親しみがもてる、といった印象である。実は、こうした二系統の描き分けが、『源氏物語』の基本的な方法となっている。次の例も、同様の表現の繰り返しといえる。

そのころ十八九のほどやおはしけむ、御容貌も心ばへもとりどりにぞをかしき。姫君（大君）はいとあざやかに気高ういまめかしきさましたまひて、げにただ人にて見たてまつらむは似げなうぞ見えたまふ。桜の細長、山吹などの折にあひたる色あひのなつかしきほどに重なりたる裾まで、愛敬のこぼれ落ちたるやうに見ゆる、御もてなしなどもらうらうじく心恥つかしき気さへそひたまへり。いま一ところ（中君）は、薄紅梅に、御髪いろにて、柳の糸のやうにたをたと見ゆ。いとそびやかになまめかしう澄みたるさまして、重りかに心深きけはひはまさりたまへれど、にほひやかなるけはひはこよなしとぞ人思へる。碁打ちたまふとて、さし向かひたまへる髪ざし、御髪のかかりたるさまども、いと見どころあり。

（竹河⑤七五～七六）

（女はらから）の物語史（大井田）

玉鬘の大君・中君に関する叙述である。「空蟬」の描き分けによく似ており、後の宇治の大君・中君の造型にも通ずるものがある。「竹河」は、鬚黒の死後、未亡人となった玉鬘が、娘たちの処遇に悩む姿を描いている。冷泉院の熱心な養母もあり、大君は参院、やがて皇女・皇子を出産する。一方、中君は尚侍として出仕する。大君を参院させるのは、中君よりも母玉鬘に似ているからである。点線部は大君の描写だが、「人の御さまもけ近くいまめきたる」（蜩④二〇三）「いとなつかしく若やかなり」（常夏④二二三）、「愛敬づきをりまさり」（同④二三五）などといった、かつての玉鬘を彷彿させるものとなっているのである。

四

姉妹の物語に執ってきた『源氏物語』にとつて、宇治十帖とは、（女はらから）の物語の総決算とも目される。この話を導入することで、女の身の処しがたさという、物語が当初から抱いていた深刻な主題が、あらためて問い直されることになる、とさえよう。

零落した父八宮によって、男手一つで育てられた、大君・中君は、そうした不遇にあるだけに、とりわけ仲の良い姉妹であった。

二ところ、いとど心細くもの思ひ続けられて、起き臥しう

ち語らひつつ、「一人一人なからましかば、いかで明かし暮らさまし。今、行く末も定めなき世にて、もし別るるやうもあらば」など、泣きみ笑ひみ、戯れごとまめごと、同じ心に慰めかはして過ぐしたまふ。(椎本⑤一八七)

宇治の山里で、ひっそりと肩を寄せ合つて生きる姉妹に、どのような運命が待ち構えているのであろうか。

晩秋の宇治を訪ねた薫は、はからずも合奏に興ずる姉妹を垣間見する。国宝『源氏物語』にも描かれた、優艶な場面である。

あなたに通ふべかめる透垣の戸を、少し押し開けて見たまへば、月をかしきほどに霧りわたれるをながめて、簾を短く巻き上げて人々ゐたり。簀子に、いと寒げに、身細く萎えはめる童一人、同じさまなる大人などゐたり。内なる人(A)は柱に少し隠れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりしつゝゐたるに、雲隠れたりつる月のはかにいと明くさし出でたれば、「扇ならで、これしても月は招きつべかりけり」とて、さしのぞきたる顔、いみじくらうたげに、はひやがなるべし。添ひ臥したる人(B)は、琴の上にかたぶきかかりて、「入る日をかへす撥こそありけれ、さま異にも思ひ及びたまふ御心かな」とて、うち笑ひたるけはひ、いまま少し重りかによしつきたり。「及ばずとも、これも月に離るるものかは」など、はかなきことをうちとけのたまひかはしたるけはひども、さらによそに思ひやりしには似ず、いとあはれ

になつかしうをかし。昔物語などに語り伝へて、若き女房などの読むをも聞くに、必ずさやうのことを言ひたる、さしもあらざりけむと憎く推しはからるるを、げにあはれなるもの限ありぬべき世なりけりと心移りぬべし。

(橋姫⑤一三九―一四〇)

この場面は、解釈上、大きな議論のある箇所である。すなわち、姉妹の区別が必ずしも分明でない。「姫君に琵琶、若君に箏の御琴」(橋姫⑤一二四)とあることから、『細流抄』『岷江入楚』『湖月抄』などは(A)「内なる人」を大君、(B)「添ひ臥したる人」を中君とする。真淵の『新釈』で逆転、以後、多くの注釈が踏襲している。これは、人物像、人柄にもとづく理解である。「姫君は、らうらうじく、深く重りかに見えたまふ。若君は、おほどかにらうたげなるさまして」(橋姫⑤一二二)とあるのによれば、(A)を中君、(B)を大君とみるべきである。音楽に堪能な姉妹が楽器を交換することは、さして珍しいことではあるまい。また、種類に関わらず、中君の楽器には「御」の敬語がつくが、大君はそうでないとの指摘⁷⁾もあり、やはり近年の解釈によるべきだろう。

「椎本」巻末では、薫の二度目の姉妹垣間見が語られる。前回から二年後の夏、八宮は既にこの世の人でない。

まづ一人(中君ガ)立ち出でて、几帳よりさしのぞきて、この御供の人々のとかう行きちがひ、涼みあへるを見たまふ

なりけり。濃き鈍色の単衣に萱草の袴のもてはやしたる、なかなかさまかはりてはなやかなりと見ゆるは、着なしたまへる人からなめり。帯はかなげにしなして、数珠ひき隠して持たまへり。いとそびやかに様体をかしげなる人の、髪、袿に少し足らぬほどならむと見えて、未まで塵のまよひなく、艶々とこちたううつくしげなり。かたはらめなど、あならうたげと見えて、にほひやかにやはらかにおほどきたるけはひ、女一宮もかうさまにおはすべきと、ほの見たてまつりしと思ひ比べられて、うち嘆かる。また、(大君ガ) ゐざり出でて、「かの障子はあらはにもこそあれ」と見おこせたまへる用意、うちとけたらぬさまして、よしあらむとおほゆ。頭つき、髪ざしのほど、いまま少しあてになまめかしさまざりたり。(中略)「いみじうもあるべきわざかな」とて、うしろめたげにゐざり入りたまふほど、氣高う心にくきけはひ添ひて見ゆ。(中略)紫の紙に書きたる経を片手に持ちたまへる手つき、かれよりも細さまざりて、瘦せ瘦せなるべし。立ちたりつる君も、障子口にゐて、何ごとにかあらむ、こなたを見おこせて笑ひたる、いと愛敬づきたり。

(椎本⑤二一八〜二一九)

ここでも二人の描き分けが、かなり明瞭であり、前掲の空蟬・軒端萩の垣間見場面とよく似た表現も見られる。

明朗で華やかな中君にも魅力を感じないわけではないが、薫が

(女はらから)の物語史(大井田)

より心を惹かれるのは、大君のほうである。性格的な相似が、二人を互いに結びつけようとするのであろう。しかし、大君は、篤実で謹直な薫に好意を抱きつつも、むしろそれゆえに、妹との結婚を思い描く。三者の関係は一向に進展をみないのだが、かかる膠着状況を打破したのが、匂宮であった。姉妹にそれぞれの男性が配される、『伊勢物語』第四十一段とよく似た人間関係の構図である。もちろん、匂宮は「いやしき男の貧しき」などとはほど遠い存在ではあるけれども。

中の宮は、思ふ方異なめりしかば、さりとともと思ひながら、心憂かりし後は、ありしやうに姉宮をも思ひ聞こえたまはず、心おかれてものしたまふ。(総角⑤二六二〜二六三)
 宮は、いつしかと御文奉りたまふ。山里には、誰も誰も現の心地したまはず思ひ乱れたまへり。さまざまに思しかまへけるを色にも出だしたまはざりけるよと、疎ましくつらく姉宮をば思ひ聞こえたまひて、目も見合はせたまはず。(総角⑤二六九)

薫の手引きによって、はからずも中君は匂宮と結ばれた。大君の関知しない、不本意なことではあったが、先の薫の侵入の一件もあり、中君は姉に対して不信任を抱くようになる。「同じ心」であったはずの、姉妹にすれ違いが生じてきているのである。

さて、匂宮は中君をいとおしく思いつつも、その身分ゆえ、気軽に宇治を訪れることも叶わない。大君は、妹の不運を嘆き、薫

を恨めしく思いながら、世を去った。この世に残された、薫と中君の関係は、おのずと微妙なものとなってゆく。

いと盛りりにほひ多くおはする人(中君)の、さまざまの御もの思ひに少しうち面瘦せたまへる、いとあてになまめかしき気色まさりて、昔人(大君)にもおぼえたまへり。並びたまへりし折は、とりどりにて、さらに似たまへりとも見えざりしを、うち忘れては、ふとそれかとおぼゆるまで通ひたまへるを (早蕨⑤三四七)

これまでは、大君と中君は、その対照性が強調され、描き分けられていた。しかし、大君の死後、むしろ中君との類似が際立つてくるのである。これは、薫が大君の面影を中君に求めているからに他なるまい。薫・大君物語から薫・中君物語への展開が予想されるのであるが、物語はそのようには展開してゆかない。やや唐突だが、異母妹の浮舟が新たに登場することとなる。

(中将の君)「かの過ぎにし(大君)御代りに尋ねて見むと、(薫ハ)この数ならぬ人をさへなむ、かの弁の尼君にはべのたまひける。さもや、と思うたまへ寄るべきことにははべらねど、一本ゆゑにこそとはかたじけなければ、あはれになむ思うたまへらるる御心深さなる」など言ふついでに、この君をもてわづらふこと、泣く泣く語る。(東屋⑥四七〜四八)「一本ゆゑに」とあるように、まさに浮舟は亡き大君の「ゆかり」である。『源氏物語』において、「ゆかり」が物語を進展さ

せ、長篇化を支える重要な契機となっていることは、第一部・第二部においても明らかであるが、物語の終焉に至るまで、このモチーフは繰り返し用いられているのであった。あらためて『源氏』の〈女はらから〉への強い執着がうかがえる。

五

後期物語の〈女はらから〉の例を見ておきたい。『夜の寢覚』巻一の冒頭部は、『源氏物語』橋姫巻を強く意識して書かれている。主人公中君の卓抜した楽才が次のように語られている。

端近く御簾巻き上げて、宵には例の箏の琴を弾きたまひて、人静まり夜更けぬるにぞ、琵琶を、(天人ノ)教へのままに、音のある限り出だして弾きたまへれば、姫君(大君)、「つねに弾きたまふ箏の琴よりも、これこそすぐれて聞こゆれ。昔よりとりわけ殿の教へたまへど、つねにたどたどしくてえ弾きとどめぬものを、あさましき君の御さまかな」と、聞きおどろき、うらやみたまふ。(新編全集・一九)

中君は箏の琴を演奏するのが常であり、琵琶は姉の大君の楽器だった。ここで中君が琵琶を弾くのは、後に姉の婚約者、権中納言と契ってしまうことの伏線である。また、この記述は、先に引用した、「橋姫」の垣間見場面で、姉妹が楽器を交換していたこととの証左となるだろう。

簾巻き上げて、三十に今ぞ及ぶらむとおほゆるほどなる人（対の君・中の君の従姉妹）、高欄のもとにて和琴を弾くあり。頭つき、様体ほそやかに、しなしなく、きよらなるに、髪の毛いつややかにゆるゆるとかかりて、目やすきかな、と見ゆるに、向かひざまにて、紅か二藍かのほどなめり、いと白く透きたる好ましげなる人（但馬守三君・対の君の姪）、すべり下りて、長押に押しかかりて、外さまをなぐめ出でて、琵琶にいたくかたぶきかかりてかき鳴らしたる音、聞くよりも、うちもてなしたる有様、かたち、いと気色ばみ、なつかしくなまめき、こぼれかかる額髪の絶え間のいと白くをかしげなるほどなど、まことしく優なるものかな、と見ゆるに、箏の琴人（中の君）は、長押の上に少し引入りて、琴は弾き止みて、それに寄りかかりて、西にかたぶくまに曇りなき月をながめたる、このゐたる人々ををかしと見るに比ぶれば、群雲のなかより望月のさやかなる光を見つけたる心地するに、あさましく見おどろきたまひぬ。

（同・二八〜二九）

右は、権中納言が、女君たちを垣間見する場面である。婚約者の妹とはつゆ知らず、箏の姫君の美しさに心を奪われ、契つてしまふ。中君と合奏しているのが大君ではないことに注意したい。橋姫巻の宇治の姉妹の安易な二番煎じは、周到に避けられている。この垣間見を契機として、この姉妹はあややかな運命に翻弄され

（女はらから）の物語史（大井田）

てゆくことになる。

むすび

（女はらから）のモチーフから、王朝物語を通覧してきた。美しい姉妹を男性が垣間見ることから恋物語が発するという話型は、多くの物語に指摘できる。初期の『伊勢物語』では、当の姉妹にはあまり関心がなく、描き分けもなされていない。むしろ、姉妹をいたわる、男の思いやり、美質を賞賛することに主眼がある。続く『うつほ物語』では、仲睦まじく育ってきた姉妹が、結婚によってそれぞれの道を歩み、明暗を分けるようになる様子が描かれる。また、相手への嫉妬など、心情的なすれ違いも描かれるようになる。（『男の物語』から『女の物語』へと関心を移しているようである。『源氏物語』にいたると、姉妹の描き分けが、いつそう微に入り顕著となる。この話型が要素所に繰り返し用いられ、新たな物語を織りなしてゆく原動力にさえなっている。「ゆかり」、すなわち血縁を、物語が長篇化の重要な契機としていえることが、あらためて確認されるのである。

注

（一）鈴木日出男『伊勢物語評解』（平成二十五年、筑摩書房）

- (2) 丸山キヨ子『源氏物語と白氏文集』(昭和三十九年、東京女子大学学会)
- (3) 『折口信夫全集 ノート編 第十三卷』『伊勢物語』(中央公論社、昭和四十五年)
- (4) 由良琢郎『続伊勢物語人物考―藤原敏行と在原業平―』(昭和五十七年、明治書院)が、かかる解釈の可能性を示唆している。
- (5) 仲忠とあて宮、女一宮の関係については、拙著『うつほ物語の世界』(平成十四年、風間書房)所収の諸論を参照されたい。
- (6) 土方洋一「姉妹連帯婚」的発想―源氏物語から―(『日本文学』平成元年五月)では、「作者の書き方が曖昧なのであり、大君と中君とはつきりと描き分けるような叙述の方法がとられていない」といい、近代的な「個性」や「人格」による読みを批判する。しかし、近代的な「個性」とは異なっている、それによく似た描き分けが、この物語で丹念に繰り返されていることは疑いない。
- (7) 森野正弘『源氏物語の音楽と時間』(平成二十六年、新典社) 第II編第七章「宇治姉妹と箏の琴」

キーワード：女はらから、垣間見、結婚、伊勢物語、うつほ物語、源

氏物語

Abstract

（女はらから）の物語史（大井田）

Sisters in the tales of Heian period

Haruhiko Oida

In the tales of the Heian period, there are many scenes that a man peep at two beautiful sisters.

By peeping, a lot of tales are started. Especially, 1st and 41st chapter of *Isemonogatari* had a great influence on following tales. In *Isemonogatari*, *Narihira* helped his poor brother and sister-in-law.

He was praised for his compassion. In contrast, portrait of the sisters is obscure, we cannot differentiate.

In *Utsuhomonogatari*, *Atemiya* and *Onnna-ichinomiya* had grown together in *Sanjoin*. After a while, *Atemiya* had married the Crown Prince, and be called *Fujitsubo*. *Onnna-ichinomiya* had married *Nakatada*. *Atemiya* was annoyed by jealous ladies. She envied *Onnna-ichinomiya* her good luck. This tale has interest in women's life.

In *Genjimonogatari*, the motif of two sisters is repeated, and portrait of the two is detailed. At first, *Kaoru* loved *Oikimi*, after her death, he loved *Nakano-kimi*. Finally he married *Ukifune* who is half sister of *Oikimi*. This motif is essential to prolong tales.

Keywords: sisters, peep, marriage, *Isemonogatari*, *Utsuhomonogatari*, *Genjimonogatari*